黄金時代ver2014

hikali

目を覚ましたすべての「はらぺこ」たちへ

あるあさ目が覚めつめたい井戸の水を飲むとはらぺこで、早起きであたたかい小麦の匂いをさせている台所にかけこんだ。煮てさえいない、塩水につけただけの剥き出しのひえたじゃがいもにどぼんと手を伸ばしかじりつこうとする。
「はやいね、はらぺこかい？ そいつもさ、揚げてやるから、皮剥いとくれ、すぐに砕くから」
おふくろは、ちゃっちゃとラードの塊を小麦生地を膨らませる鉄なべに放りこみ、返しで器用にひっくり返して、香ばしい焼き色をみせた。
あわてて包丁の錆びた刃を、二回三回と水に濡らした砥石でこすると、甕のいもに手を伸ばし、乱雑に皮を削って手際よく塩水に投げていく。
「今日はなんだい？ 祭でもあったかね」
「ちがう、桜じゃ」
意気込んで答えると、おふくろは感心した。
「「さくら」？ あたらしい菓子かね、そいつは。こんな朝から並ぶなんて、甘いのかね、その「さくら」とやらは？」
「ちがうわい、食ったりせん、花じゃ」
むきになってじゃがいもを投げ込むと、おふくろの手がそれをすくい上げ、包丁の背でがんがんと砕いていく。潰していく。それを楕円の板状にすると、無造作に高熱で跳ねるラードの中へ滑りこませていった。
「梅も、桃も、花はもう終わったろう？」
「だから、桜じゃ。お屋敷の貴族が東方大陸から大樹ごと買ってきたんじゃ。そのお披露目があるんじゃ、今日」
浮かび上がってくるマッシュポテトをひとつひとつすくい上げ、それを小麦の生地の上にのせて、脂を切る。匂いだけで腹がなった。
「団子ぐらい、でるのかい」
「それぐらいは」
「やっぱり菓子かい、目当ては」
口ごたえも馬鹿らしくなって、朝の皿を並べる。棚からレバーペーストと、魚とトマトの酢漬けの瓶を取り出し、湯気をあげはじめた食卓に並べていく。
家族を待つ祝日の朝はいつももどかしい。
あつあつのポテトの上にたっぷりのレバーを塗ったくると、じゅっと脂が焦げる匂いがした。透明のガラスのビネガー瓶にはよく染みたトマトと魚が、オニオンスライスと香草の中に沈む。うまそうなのをいくつかすくうと、小麦のクレープと香草の上に乗せて、くるっと巻いた。
ビネガーの香りがたまらなく広がった。
「先いくで、もう」

井戸水をコップにすくうと、むしゃりとポテトにかじりつく。2個3個と、数だけは尽きないのが、甕いっぱいのじゃがいもだ。あわてて揚げたてを乗せてくれるのに、つぎつぎとペーストを塗って平らげる。
「なんだい、自分だけかい」
「今日は急ぐんじゃ」
はきすてるように朝の食卓を飛びだした。

祝祭のうわさはいつも風から聞く。
この国の金持ちたちはお祭り騒ぎが大好きで、あちこちの広場に見物人を集めては、飾った髭と、騒々しい楽団付きの口上で、もったいぶった次の祝祭の告知を行う。
この祝祭都市でいちばんの、気前いい男との評判はなににもかえがたい名声らしく、やれ今月は評判の喜劇だ、来月は盛大な戦艦レースだと、手をかえ品をかえ黄金をばらまくものであるから、今回のような桜の樹のおひろめなんて趣向はとても上品に思えたし、地味とさえ言えた。
――団子をちゃんと、配ってやればいいんだ。
いくつめかの空振りの広場を過ぎ、花びらをかたどった菓子を持つものはないかさがす。
これが先週のように、大漁の牡蠣の大盤振る舞いの食べ放題であれば、北海の濃厚な潮の薫りのみならず、がちゃがちゃと一キロ先でだって鳴り響く捨てた貝殻だって道しるべになったのに、このつつましい桜とやらは、いっこうにその方角さえ示してくれないのだ。
いったいどこにむかっているのかさえ分からない。
どんな花なのかさえも知らない。
桃のように白い、薫りはあまりしない、としか聞いていない。
風のはなしはとらえどころがなく奔放で、それに出会ってさえ、それだとわかる自信はほんのこれぽちも持ち合わせてはいないのだ。いつもそうだ。
「あら、たいそうな自信ね。いつもの身のほど知らずは、そのときから？ それで、そのいたいけな少年はどうなったのかしら？」
「もちろん牡蠣の貝殻を投げて方向を決めたさ」
「ちがうわ、忘れたの？」
仕方なく笑う。
「忘れてない、が」
短い黒髪に白い花びらを乗せた子をみつけると、強引にその手首を握った。
「いたかったわ、かなりずいぶん」
まさか女の子とは思わず、気付いたのしばらくあとだったが、そもそも花見を好むのは、手首が細くて髪はみじかく、もやしっ子とまではいかなくとも、焼き貝を膨れるほど食べ尽くすことにはあまり興味がない子の領分なのかもしれないと考え直した。
「反省したさ」

「なにを？」
「こいつはちょっと特別すぎるって、このやり方は通用しないってさ」
「あのときは、うまくいったじゃない」
　散々と誤った道を教えられ、いくつもの生け垣をくぐり泥だらけになったのは、「優秀な道案内」のよけいないたずらごころのおかげ以外のなにものではなかったのだが、それは出会ってすぐにずいぶん気に入られたということらしかった。
「仲間を、ひとり抱える羽目になってか？」
「ご不満でも？」
　すこしだまった。
　じつのところ三日三晩と言わず、すべてが散り尽くすまで桜の樹の下に集ったのち、別れ難くなってそれからつるむようになったのだ。
　息をする。
「危険を冒せなくなった」

　黄金時代は風のじだい。
　せかいの便りを風にきき、貿易風にも乗っていく。
　風のぜんぶにりょううでのばせば、世界のぜんぶがそこをとおる。風のこえがきこえたとき、それはぜんぶ書いていいんだってことばだった。
　目にする世界すべてが、書いていいよとほほえんでいた。なにもかもが、ぼくに書かれるために世界に生まれてきたんだと、産声を上げていた。
「白銀の時代は？」
　鼻で笑った。
「ぴかぴかのメダルとチェックシートの束さ、それと煙草かな」
「やめたんじゃなかったの？」
「冗談いうなよ、仕事やめていいなら考えてもみるが、世界じゅうが一枚の地図とありったけのチェックシートの束になっちまったんだ。かもめの波止場だって、ヤニくさい束のテキストの中だ。メエメエうるさく鳴いてると、きっと灰でもおちて火事になっちまう。お嬢さん、どこへいくんだい？ 京都かい、なら、いいチェックシートがあるよ、写真も豊富だし、チェック欄もいい、おしゃれだろ？　流行りのチェックシートだ。いまならスタンプ10個でバターコーンのセットと交換できる。ぴかぴかメダルもたくさん出るよ」
　肩をすくめて呆れ返った。
「うんざりだ。ぜんぶがだよ。なにもかもが、うんざりなんだ。メダル集めなんかしている年齢じゃないだろ、おれたちはいいかげん」
「あら、成績優良者は名前が売れるし、お金になることにだってつながるわよ？」

「ビルボードのメダルランクを買い漁っている連中が、どうも楽しそうには思えなくてね。それにありゃあ、メッキ塗りだ、真鍮製でさえない。ちょっと擦ればお里が知れる。つくろう為にメッキなんて臭いもんを塗るんだ。醜悪だ。そりゃあ、ぴかぴかになるかもしれない。だがすこしでもコンロの前に立てば、すぐにばれる」
「そう？」
　楽しそう笑い、言葉を同時に発した。
「あいつはポモドーロだって作れない」
　起き上がって水差しの水を飲み干すと、雨が降っていた。
「あーあ、ザンネンだなー、あたし、すっごい楽しみなのに、だってこんなに待ったんだよ、もう待ちくたびれたよ」
「なにを？」
　楽しそうな笑みがおれの顔中をなめていく。
「あなたのメッキ姿」
「冗談いうな、研究室の昆虫標本の、薬臭いコレクションの気分だ」
　それでも満足そうにうんうん頷き、きっとみんな騙されるだろうなあと楽しそうに想像をめぐらす。
「それでタキシード姿のあなたの前に座って、湯気の中から出てきた白い皿のポモドーロをすこしだけすくって、喉の奥でそれをゆっくり味わうの、そうしたら、言ってあげる。それが、あたしの夢なの」
　おれは鼻白んだ。
「なんて？」
　とてもうれしそうに、とろけるように笑う。

「あなたも、ずいぶんえらくなったものね」